
真夏の夜の夢

杉山邦夫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真夏の夜の夢

【Zマーク】

Z1896Z

【作者名】

杉山邦夫

【あらすじ】

奇怪な夢。死とバイオレンス。（どうつい）暴力描写は一切ありません（せん）幻想的、不可思議なお話です。（こういつ）（こういつ）作品も書いたりします）

真 夏 の 夜 の 夢

杉 山 邦

夫

子供の頃、繰り返し空を飛ぶ夢を見た。傘にぶら下がり、両手を羽のように羽ばたかせ、あるいは、いぶし拳をしつかりと握りしめ、腕を戦闘機のプロペラのように回して、何度も大空へと舞つた。風を切り、揺られながら、ある時は単にふわふわと浮かび、その気になれば、どこまでも飛んで行けた。

眼下には母なる大地が広がり、遙か彼方に、広大な地平線が見える。飛べども飛べども飛び尽くせない大空に、熱く胸をときめかせた。

それは夢といつにはあまりにリアルな体験だった。

まだ時空に慣れ親しんでいない子供だった私は、夢と現実の区別がつかなかつた。昼間、日覚めている時、ふと空を飛ぼうと思いつて腕を回したり、羽ばたかせたりするのだが、いくら藻搔もがしても、飛び立つことが出来なかつた。けれど夜になれば、夢の中で、私は空想の翼を羽ばたかせ、何度も空を飛んだ。そして日覚めでは、何度もつまづ躊躇つまづぐのだった。

そしていつの頃からか、

私はまったく空を飛ぶ夢を見なくなつた。

真夏の夜の夢

真夏の夜の夢

真夏の夜の夢

また、暗号に振り起こされた。ぼんやりと、自分は諜報部の特殊工作員なのだと思い出す。そんなわずかばかりの（役に立たない）アイデエンティティだけを残して、記憶はいつものように、全て消されている。ただ脳裏に刻まれた、

それが今回指令であり、今回の、私、であつた。

広く横たわる無人の空間は、まるでコロシアムの内部のようだつた。薄暗い石畳には、砂利が散乱している。生物は何もいない。私は立ち上がり、歩き出す。靴音が高く響く。次第に、この場所の様子が明らかになる。ここが何処かは知らないが、教会の回廊のように、無数の高い石柱が立ち並び、上方で弧型のアーチを造っている。警戒を要する兆候は、今のところ、見あたらぬ。

出口を探し、歩く。

前方に、光の帯が差し込んでいる。近づくと、目が眩むくらいに、目映い。^{まばゆ}両腕でしっかりと顔を覆い、慣れるのを待つ。田に飛び込んできたのは、扉なく、外部に開けた open space だつた。優に七八階はある。そんな崖つぶちに立ち、外を眺めると、隙間なく立ち並ぶ背の高い建物の間隙をぬつて、細長い路地が真っ直ぐに延びていた。遠方には山々が聳^{そび}えている。眼下には、ルソーの絵のような調子で、疎^{まば}らな人影が歩いている。

右手の建造物は不思議絵さながらの構図で、何本かの廊下は吹き抜けのまま外部に繋がり、階段は平然と屋根まで突き抜け、人通りがある。だがみんな、テレビゲームのキャラクターのような動きをしていた。人々は怖がることなく縁に立ち、煙草を吸つてくつろぎ、休んでいる。彼らの脳は、墜落するという可能性を思い浮かべることもできないらしい

それがこの国の慣習なのか？どうも、目に見ても、たがの外
れた、まともな世界とは思えない。

むき出しのまま屋根へ伸びた階段の入り口では、二人の男が立ち話をしていた。共に口髭をたくわえた、西アジア系の顔立ちをしている。彼等の動作だけは、周りの連中と違つて、やけに人間っぽかつた。

それがやけに私の神経に障る。苛立ちは急激に加速する。それは白夜の国に連行され軟禁され、極浅い眠りしか許されず、次第に、精神の闇部に歪みを植えつけられていく感覚に似ていた。

懐からシガレットケースを取り出す。中にはペンシリロケットを改良した、超小型ミサイルが埋められていた。ケースは三段階に伸縮可能で銃口の役割を担い、ライフルの直進性と手榴弾を遙かに凌駕する破壊力を持ち合わせていた。また銃声と違つて、発射音は事後に周囲の警戒を引き起こすこともない。

私は狙いを定めた。標的は約三十メートル先。甦るのは、過去に何度となく味わつた、人間の土手つ腹に穴を開けられる快感。この瞬間はたまらなく愉快だつた。俺達はこれを滋養に生きているようなものだつた。私はだらしない程ににやけた笑みを浮かべ、引き金を弾く。

ミサイルは火を噴いて飛び出した。

だがそれは遠く的を外れ、鈍く瓦を碎くにどどまつた。

• • • • • • • • • • • • •

信じ難い光景だった。この私が失敗するなんて、そんなことは、

絶対にあり

得ない。だがこの武器の、あまりに期待外れの殺傷能力は・・・組織が渡したのは、全くのまがい物だった。私に宛わるのはいつも、最新型のはずなのに。

奴らはゆつくりと私の方を振り向いた。

子供に、小石か何かを投げつけられたように、奴らは落ち着き払っていた。私は完全に見くびられた。奴らに敵意を喚起させることさえ出来なかつたのだ。心臓がばくばくと波を打つ。全身の血が逆流した。かつて味わつたことのない屈辱に、怒りに震えながら、私は一発目の導火線に火をつけた。だが、狙いは又も外れた。

今度はさすがに奴らも敵意を露わしたが、ただうん臭げに睨むだけ、警戒心もなにもない。そして何やら話し始める。唇を読むと、アラビア語だ。そんな高度な技能も、今は何の役にも立たない。

ケースごと残りのおもちゃを放り出し、殺人本能の目覚めるままに、この空間を飛び越え、直接ナイフで斬り倒すしかない。奴らの全ての肉を、その骨から引きちぎつてやりたかった。だが眼前の不可能が、衝動を徒に煮えたぎらせるだけだ。その時、

「真夏の夜の夢」

背後で、私を呼ぶ声がした。振り向くと、つばの広いスペイン風帽子を被つた、黒尽くめの男達が立つてゐる。

「真夏の夜の夢」

もう一度、真ん中の男がはつきりと暗号を発音した。
わたし

(真夏の夜の夢・・・・・?)

! ! !

解説はにわかに完了した。それは・・・組織にとって、利用価

値を亡くしかけた私への最終テストと、来るべき事後の殺害計画遂行の、プログラムだつた。

高い石煉瓦の防波堤の間を流れる鎧れた川に、工場からの排水が泡だちながら注ぎ込んでいる。岸と呼べるようなものはない川面は鈍く淀み、後ろ手を縛られた者が這い上がるには、優に致死量の水深を保つていて。藻もさえも生息していない、赤くケミカルに汚染された水は、どんな原始的な生物の存在をも拒んでいる。

私は溺れることができず、手^か搔き足搔き悶^{もだ}えるであらう。そして汚水は容赦なく、鼻から口から、体内に浸食を始めるだらう。気管に達する度に、身体は条件反射で吐き出し、けれどその弾みでより一層、多くを飲み込んでしまうのだ。

そんな生物的特性を利用した拷問が、間もなく開始される。もはや避けられない死は苦痛でも何でもなかつた。だがそれ迄の、生きてなければならない時間が、背筋を凍りつかせた。

「このまま突き落とすのか？」

足腰が萎え、崩れそうになる。一人の男が後ろから、がたがたと震える私の身体を、がっちらりと両腕で支えた。

「心配するなよ」

リーダーの男はにやにやと、白い歯をこぼし、黒い帽子の縁に手をやると左右に揺らした。

こいつは・・・明らかに私の反応を楽しんでいた。奴の想像した通りの顔を、私がするのが、たまらなく愉快だと聞いたげに、懷からナイフを取り出し、

「こうして殺つちまつてから、突き落とすんだからなあ

鋭く振り下ろした。頸動脈を狙つた刃は深く肉を抉り、気管を切り裂き、頸骨にまで達した。威勢良く舞い上がる真つ赤な血しぶきを見て、手下どもが薄ら笑う。そして血まみれた肉塊を、容赦な

く水中へと蹴り落とした。だが、

「あつ！・・・・即死にはなんねえんだから、ちつたあ痛みがあるのか？」

私の精神は肉体を離れ、そこに居残った。そして彼らが腹を抱えて笑うのを、

reincarnation (輪廻転生) . . . その神秘なる秘儀の恩恵を味わう暇もなく、私は自身の存在に氣づくやいなや、凄まじい緊張に襲われた。新しく生まれ落ちた世界 . . . ここでは、誰も彼も人間としての本能を棄て、猫として生きなければならぬ。戦争後の廃墟のよだな空間で、体を丸めながら蹲り、一糸も纏まとわぬ姿を怪しみこと、恥ずかしむこともなく、飼い主の与えてくれる餌を待つ。自身の糞尿でささやかなテリトリーに印をつけながら、しあわせそうな眠り顔に耳をぴくつかせ、日向ぼっこに精を出す・・・それがここに居るものどもの一生なのだ。

？ 何故こんな生を嘗まねばならない？ その時、監視の目が光つ
た。

あの黒装束の男だ。奴は黒の帽子を被り、堂々と一本足で直立しつつ、じっと様子を窺つてゐる。

わなわなど、俄に全身が震えだした。人間という生物に、一匹の猫しかも規格に外れればわけもなく抹殺される、そういう存在として認識されるという衝撃は、自制の許容範囲を遙かに越えていた。だが堪えなければならない。私は必死に耐えた。せめて外見だけでも、平然を装わなければならない。蹲うずくまり、息を凝らし、震える身^み体^{たい}を精一不^ふ小さく丸めた。

たわいない任務に飽きていた男は、シガレットケースから細長い

葉巻を取り出し、火をつけた。そしてひとつ長く煙を吐き、歩き出した。コツコツと、靴音が鈍く空間に響く。その後ろ姿を、警戒心を緩めずにじっと盗み見た。危険は去つた。

けれど荒い呼吸は容易に静まらない。肋骨が何度も大きく揺らいだ。これから先も、こんなことが何度も続くのだ。

真夏の夜の夢

ドジを踏まなければいい。演技なら慣れているはずだ。それくらい大したことではない。私はそう自分に言い聞かせた。

真夏の夜の夢

疑問を持つてはいけない。背後と足音に気をつけ、油断さえしなければ・・・・・

真夏の夜の夢

だが生きてる限り、恐怖が止むことはない。死ぬのはやはり苦痛である。

真夏の夜の夢

けれどそんな生き地獄さえもいつかは慣れ親しむ。ただ避けられない運命をやり過ごしていく、それが一生・・・・・そこには、

真夏の夜の夢

真夏の夜の夢

真夏の夜の夢

(後書き)

お読み下さり、ありがとうございます。
よろしけったら、他の作品もお読み下さい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1896n/>

真夏の夜の夢

2010年10月10日01時58分発行